Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Vol.41
2017

CONTENTS

■ 第11回永井隆平和記念・長崎賞授賞式の実施
■ 韓国への専門家派遣事業を実施しました
■ 韓国医師等の受入研修を実施しました（第1回、第2回）

恵の丘原爆ホームにて

第11回永井隆平和記念・長崎賞受賞式

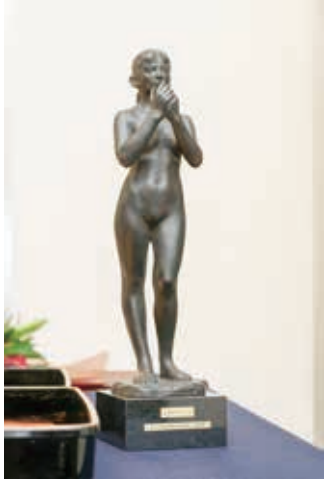
ウクライナのドミトリー・バジーカ教授に授与

ナシムでは、故・永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引継ぎ、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、平成７年に永井隆平和記念・長崎賞を設立しました。

原子爆弾による被爆者及び放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査研究の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体を表彰しています。

第11回となる今回はウクライナのドミトリー・バジーカ教授が受賞され、２月10日（金）にホテルニュー長崎において授賞式が開催されました。

第11回永井隆平和記念・長崎賞受賞者を囲んでの記念写真



受賞者の概要及び受賞理由

1．氏名・年齢 Dymytrii Bazyka（ドミトリー バジーカ）（ウクライナ）

1952年11月７日生（64歳）

2．主な経歴

・1987年～　　国立放射線医学研究センター臨床免疫ラボ研究員として免疫学を専攻

・2011年～現在　国立放射線医学研究センター所長

3．受賞理由

ドミトリー・バジーカ氏の研究の分野は放射線生物学、疫学、免疫学、放射線防護学と多岐にわたっています。

チェルノブイリ原発事故直後の1986年４月より被曝した内務省職員の治療に医療専門家として参加し、国立放射線医学センターにおいて放射線被曝の研究を開始。

1987年５月に臨床免疫学検査室において、上級研究者として細胞性免疫と放射線被曝による免疫不全の治療に関する研究を行いました。

1989年から1996年にかけて30kmの立ち入り禁止区域の除染作業員のため放射線被曝による急性放射線障害の治療の開発研究を行いました。

1996年からは放射線誘発性白血病の診断と骨髄異形成症候群、治療の副作用の低減化の研究を行っています。

また、バジーカ氏はチェルノブイリ原発事故後の汚染地域に住む人々の二次性免疫不全の治療や血液学領域の健康影響についても顕著な研究業績を残しています。

国際的には2008年からUNSCEAR（原子放射線の影響に関する国連科学委員会）に参加し、2011年からはウクライナの代表を務めています。

以上のように、バジーカ氏はチェルノブイリ原発事故により被曝した人々への治療と放射線の健康影響に関する研究に尽力され、低線量被曝の初期及び晩発期における基礎及び臨床医学の研究分野において多大な貢献をされています。

これらの活動が評価され、今回の受賞となりました。

記者会見において

永井館長より花束の贈呈

第 11 回　永井隆平和記念・長崎賞を受賞して

ウクライナ国立放射線医学研究センター 所長　**ドミトリー・バジーカ**

この度、永井隆平和記念・長崎賞を受賞いたしましたことは私にとって大いなる名誉です。永井医師の献身的な生き方は、すべての医師にとっての模範です。私たちは、若き医科学生だった時代、医師という職業に対して無私の姿勢で向き合うことについて書物で学びました。その生きたお手本が、まさに永井隆先生です。ご自身の重度の白血病にもかかわらず、永井先生は原爆被災者を助けることに身を捧げました。放射線科の医師・研究者としてなされた「原爆病と原爆医療」と題された1946年の講演は、原子力爆弾の放射能の影響に関して科学的に整理し、若い医師たちの理解を促進した、原爆に関する草分け的な情報のひとつと言えるでしょう。

広島と長崎の悲劇は、チェルノブイリ事故が起こるまでは、私たちにとっては恐ろしいけれども、なにか遠い出来事でした。しかし、事故で全てが変わりました。ウクライナでも数千人の医師が被ばくに関連した疾病の診断や治療、また住民を、特に妊婦や子供たちを、いかに被ばくから守るべきかを学ぶことが必要になりました。日本の被ばくに関連する医療の成果は、私たちにとっての計り知れない支援となりました。

放射線医学研究センターが設立されると、私たちは日本の研究者の経験に基づき、チェルノブイリ被災者専門の部署を設け、チェルノブイリ事故被災者の登録システムやフォローアップシステムを構築しました。私たちは広島と長崎の悲しい経験から学び、低線量被曝影響の研究の方向性を定めました。チェルノブイリ事故から今までの間、我々と日本のアカデミックな関係は深まり、研究成果の共同解析、研究者交流、若い研究者の研修など交流活動も広まりました。長崎大学の原爆後障害医療研究所とは長年とても充実した協力を続けております。NASHIMやその他のNPOからの大変貴重な支援にも深く感謝しております。

チェルノブイリ事故25周年は、東日本大震災による津波と福島第一原発の事故の年と重なることとなりました。私たちにとって、日本の研究者や被災者のみなさんに出来うる限りの支援をすることはとても自然な流れでした。モニタリングや治療の体系造りに関する方法論的資料をシェアし、チェルノブイリ事故の医学的影響に関するウクライナの報告書や書物を提供しました。また、多くのウクライナの専門家が日本に招かれました。私自身は、原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）において、福島の原発事故についての報告書作成に関わらせていただきました。放射線医学研究センターにおいてはこの５年の間に、日本の国会議員、医療関係者、自治体関係者、その他の専門家など、数多くの代表団を受け入れました。我々の取組みがなにかお役にたてていれば幸甚に思います。

この賞は放射線医学研究センター全体の功績に与えていただいたものと受け止めております。今回の受賞に厚く感謝申し上げます。

韓国専門家派遣事業のセミナーに参加して

長崎大学　原爆後障害医療研究所　共同研究推進部　**林田　直美**

第２回韓国専門家派遣事業として、2016年12月４日（日）および５日（月）の二日間にわたり、原爆後障害医療研究所腫瘍・診断病理学研究分野の中島正洋教授と共に韓国・釜山を訪問した。長崎県からは、ナシム事務局の西さんと、通訳を務めてくれた朴さんも同行し、４人での訪問となった。

今回の釜山の宿泊施設は、東横INN釜山西面（ソミョン）であったが、日系ホテルだけあって、日本の電化製品、コンセントプラグも問題なく使用することができ、大変快適だった。日曜日の夕方に到着したため、初日のスケジュールは市内視察のみであった。ホテルへのチェックイン後、市内の国際市場へ向かったが、クリスマス前ということもあり、大変な賑わいだった。その後チャガルチ市場まで歩き、港を散策した。

12月５日の朝に、大韓赤十字社の担当者とホテルで合流し、釜山報勲病院を訪問した。第一診療室長のイ・サンリョン先生、運営室長のイ・ホンシクさん、看護師長のパク・ユンソンさんが我々を迎えてくれた。まずは講義に先立ち、病院内を案内していただいた。この病院は、６.25戦争（朝鮮戦争）で国家のために尽くした軍人、そのご家族、および遺族のための病院であり、21の診療科を有し、ベッド数は530床である。1984年に設立され、新しい外来棟が2011年に新設されたとのことであるが、外見も内部も大変きれいな病院であった。

釜山報勲病院では、政府の支援を受けて患者の治療を行っており、無料で受診でき、さらに２世までの健康診断の支援をしているとのことであったが、健康診断部門があり、検診の設備も整っていた。病院の病理部門も見せていただいたが、若い病理医が一人ですべての診断を担当しているとのことであった。他にも検査室など、様々な部署を案内していただいたが、特に、リハビリ施設が充実しているのが印象的であった。

この病院には、ベトナム戦争に参加し、枯葉剤の被害を受けた患者も受診しているが、治療にあたる医師から、枯葉剤の影響は未だに続いており、その他にもダイオキシンの影響なども長期に続いているようだとのお話があった。このような参戦者への支援があり、アメリカに準じて生活費の補償もあるとのことであった。

病院内の視察後、12時30分より、ランチョンセミナーが開催され、中島教授と私が講師を務めた。USBでセミナーのスライドデータを持参しており、病院のパソコンを使って話をすることになっていたが、データとパソコンではパワーポイントのバージョンが異なるためか、当初はスライドが使えないとのトラブルがあった。どうしても使えない場合は、PDFでお話しすることも考えていたが、病院スタッフの努力の甲斐があって、セミナー開始ギリギリにはスライドが使えるようになった。

第一診療室長のイ・サンリヨン先生と

セミナー会場の様子

ランチョンセミナーには、医師・看護師をはじめとした病院スタッフ35人が集まった。まず、中島教授が「原爆被爆者に見られる健康影響の病理学的解析」と題し、講演を行った。講演では、原爆被爆者の急性放射線健康影響について、原爆後障害医療研究所での「発がんリスクと放射線」に関する疫学研究の紹介について、さらに、原爆被爆者の組織を用いた放射線関連発がんに関する分子異常解析についてお話し頂いた。講演後、循環器内科の医師より、被爆２世への放射線影響、生殖細胞への放射線影響について質問があった。この医師は、血管造影による遺伝的影響を心配しているとのことであった。中島教授から、放影研の追跡調査では現在まで有意な健康影響はみられず、今後長期にわたりフォローしていく必要がある、との回答があり、大変安心された様子であった。

続いて、私が「チェルノブイリ、福島における小児甲状腺の比較」と題し、講演を行った。私からは、主に、原爆における健康影響としての発がん、特に甲状腺がんのリスク、チェルノブイリ原子力発電所事故後の甲状腺がん増加、さらには、現在福島県で行われている甲状腺検査の結果とチェルノブイリとの比較についてお話しした。会場からは、今回の福島での原子力発電所事故による甲状腺への影響についての心配は減ったが、日本では原発の汚染水を海に放出していると聞いたことがあり、海水が汚染されたことによる韓国や中国などへの影響はないのか、との質問があった。私は環境分野の専門家ではないため、明確な答えはできなかったが、原発は太平洋側であること、市場に出回る海産物は放射性物質の測定が行われていることを説明し、理解して頂けたようであった。

セミナー終了後、市内で昼食をとり、帰国の途に就いた。今回の韓国訪問は、大変短い滞在であったが、非常に充実していた。セミナーにも多くのスタッフが参加して活発な議論が交わされたが、放射線に対する病院スタッフの関心が伺われ、改めて本事業の重要性を認識させられた。中には現在でも福島第一原発事故の影響を心配している声も聞かれ、放射線教育として、原爆の影響を伝えることはもちろんであるが、福島第一原発事故後の日本の現状を伝えることも必要ではないかと思われた。

韓国医師等の受入研修を実施しました

韓国医師の受入研修を10月と２月に２回実施しました。
参加いただいた皆様からこのような感想をいただきました。

第１回　平成28年10月９日～13日

尹　載鉉（ユン・ジェヒョン）先生　釜山報勲病院　看護師（老年介護）

先ず、４泊５日間の学びの機会を与えてくださった両国の関係者の皆様、特に通訳だけではなく福岡空港に到着してから研修期間中、不自由のないよう細心を払い配慮してくださった、ナシム事務局に感謝の言葉を贈ります。

今回の研修を通じて原爆に対する全般的な内容、被爆の惨状、人体に及ぼす影響等、今まで管理してきた資料を体系的に聴く事ができ、改めて原爆の危険性を感じました。

原爆に関して積極的に研究する姿勢、彼らの努力があらゆるところから見られて日本の方たちのすごさを感じ、また、教授たちの熱心な講義も印象的でした。

方々に飾ってあった平和を祈る千羽鶴や被爆者を追悼し平和の念願を込め建てられた平和公園を眺めながら現在に感謝し、もう二度とこの地に原爆の惨状が起きてはいけないと思いました。

忘れられない研修になりました。本当にありがとうございました。

李　在敏（イ・ジェミン）先生　嶺南大学医療院　小児科医

平素、接し難い原爆および放射線照射後に発生する健康障害に関して、貴重な情報に接することができ、とても大事な時間だった。

苦痛の時間を経て、辛かった記憶をどのように保管し、処理し、どのような方法で子孫に伝えるべきか、また、それらからどんな教訓を得られるかについてたくさん考えるようになった。

実際、福島の原発事故を克服していく事例は、単なる数人の科学者、行政者の努力ではなく、過去から培った知識と経験がその土台になったと思う。

目先の辛い時間が過ぎた後、どのように未来を準備していくかについて様々に考えさせてくれた良い経験だった。

鄭　秀卿（チョン・スギョン）先生　慶熙医療院　看護師長

研修期間の間付き添い案内してくださった事務局にお礼申し上げます。研修を通して原爆について学び、他国のことではなく自分たちの周りからも起こり得ることだと知り、大変勉強になりました。本当にありがとうございました。

崔　賢敬（チェ・ヒョンキョン）先生　ソウル赤十字病院　臨床心理学医師

・長崎大学の先生方の講義が大変良かったです。
・原爆資料館、爆心地見学など、大変印象深かったです。
・グラバー園、稲佐山展望台の観覧もよかったです。
・講義と見学等の時間配分が適切だったと思います。
・福岡空港から長崎まで２時間半くらいかかるため、簡単な食事が取れるよう、移動する前に知らせて欲しいです。
・ナシム事務局の誠心誠意な案内と通訳に感謝の言葉を贈ります。

李　貞雨（イ・ジョンウ）先生　ソウル赤十字病院　総務課長

・研修期間は大変適切だった。主催側の細心な配慮に感謝し、またナシム事務局に感謝の言葉を申し上げます。
・研修プログラムも原爆被害について様々な方面から知ることが出来た。
・全ての面で大変満足した研修になり、１年にもっとこのようなプログラムを企画して多くの人々が参加できるようにしたら良いと思う。

呉　賢珠（オ・ヒョンジュ）先生　尚州赤十字病院　放射線技師

・良い季節にすばらしい研修プログラムにお招きいただき、ありがとうございました。
・福岡に着いてから長崎まで移動するため昼食を取れない点が少々不便で、最後の帰国日も早朝からの移動できついです。
・原子力は私たちの生活をより便利かつ潤してくれるが、兵器としての威力は凄まじいです。そのため多くの方が犠牲になり、未だ苦しんでいるので、もう二度とこのような痛みを経験することのないよう世界が平和になることを願います。

長崎原爆資料館にて

張　成宰（チャン・ソンジェ）先生　韓国原子力医学院　免疫学研究者

・全てのプログラムが大変効率的に構成されており、参加者らに合わせている感じです。
・移動（韓国から長崎まで）時間が長く、３日という短い時間で行われましたが、とても有意義な時間になりました。
・これから直行便ができて、もう少し長く研修が受けられるようになればより良いと思います。

兪　在龍（ユ・ジェリョン）先生　韓国原子力医学院　核工学研究者

原爆に関連した長崎の施設を訪問できてとても印象深かったです。

特に原爆による被害者に対し国の支援と、関連した全ての資料を整理しデータベース化したことが印象的でした。

また、全講義も重要で必要な情報を効率的に伝えてくださり、大変細心な注意を払って準備してくださったと感じました。

個人的にはWhole-Body Countingを直接受けて、意見交換できる機会があったことが大変役に立ちました。

最後に、研修のため万全な準備と親切な説明をしてくださったナシム事務局に感謝の言葉を贈ります。

朴　貞美（パク・ジョンミ）先生　国軍大田病院　看護師（感染管理専門家）

私は病院で放射線非常診療チームに所属しています。軍の協力の下、関連訓練も実施し、教育を受けながらも放射線等による被害は本に出てくる話しだと思っていたのですが、今回の研修を通じて放射線・原子爆弾による被害と個人や地域、一国家で影響が終わるのではなく、それ以上の影響力について改めて考えることが出来ました。

医療に携わる者として原子爆弾が人体に及ぼす障害、診断、検査、治療と疫学研究についてもう一度深く考える貴重な時間になりました。

また、一個人としては人道主義的な面から、特定の国や民族、人種を考える前に人ひとりひとりが貴重で尊い存在という観点から、もう二度と長崎・広島のような悲劇が起こってはいけないと貴い教訓を得ることができました。

このような機会をくださったNASHIMと関係者の皆様に感謝の言葉を贈ります。

李　相昱（イ・サンウク）先生　国軍釜山病院　麻酔医

韓国原子力医学院が主管する放射線非常診療班所属で、このような素晴らしい海外研修を受けることができ、本当に幸運でした。

優れた教育と充実した研修プログラムを通じて、韓国でさらっと聞いた内容を直接目で確認し、災難現場を訪問して肌で感じることができました。

特に恵の丘長崎原爆ホームに訪れて実際災難に遭われたおばあさんの肉声の証言を聴き、原子力関連の災難が我々人類にどれだけ惨い結末を招くのかを知ることができました。

そしてこのような放射線災難を防止するため、過去の災難について弛まず研究し、今に至っても追跡調査・観察を続け情報を蓄積していく日本の方々の姿を見て、韓国もこのような体系的かつ持続的な訓練と研究が成されると同時に放射線災難が漠然とした事故ではなく、実際の脅威だと認識し、より対策を整え、備えなければいけないと思いました。

最後に、このような素晴らしい研修を企画し、研修が無事終わるようサポートしてくださったNASHIM関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

第２回　平成29年２月12日～16日

金　慶慈（キム・キョンジャ）先生　嶺南大学病院　看護師

５日間の研修はとても充実したプログラムでした。

原爆の被害と韓国の被害者たちの実状も知ることができました。

研修期間中、細心な配慮と教育の質を高めるためご尽力くださり本当にありがとうございました。

実は英語がそれほど上手ではないため、先生方の講義は少々厳しかったのですが、通訳を通じた時には一心に傾聴しました。

嶺南大学病院の看護師たちにナシムの研修プログラムに参加できる機会がより多く与えられれば、と思います。

新しい経験と教育に参加でき、楽しく幸福でした。

成　源燮（ソン・ウォンソプ）先生　ソウル赤十字病院　泌尿器科　病院長

研修準備とその情熱へ敬意を表します。70年以上経った今もなお被害が進行型ということに胸が痛みます。

原爆の被害者という立場から、二度とこのようなことが起こらないよう努め、悲しい記憶を忘れるのではなく、他国の人々にそれを教えていく姿に感銘を受けました。

この地球上に全ての核危険がなくなるまで、みなさまの情熱を忘れず覚えていきます。

崔　香美（チェ・ヒャンミ）先生　慶熙大学病院　看護師（心臓内科）

先生方の誠意溢れる講義に感謝の言葉を贈ります。

そして、ナシム研修を通して日韓両国がこのような分野の交流を深めていることに大変嬉しく思います。

ナシム研修を受ける前は、「原爆」といえば「広島」を思い浮かべましたが、この穏やかな街に凄惨なことが起こったことを知り、被爆者たちの人生はどれほど苦しかっただろうか、と他国民ながらも胸が痛みます。

日本は国のため偏見や差別を受けた被爆者の皆に許しを請い、最後まで彼らの苦しい人生を理解し、最善を尽くしてくれると思います。

そして、二度と国家のために国民が被害を受けるようなことがないよう、心から切に祈ります。

梁　美賢（ヤン・ミヒョン）先生　韓国原子力医学院　看護師

ナシム関係の皆様の熱い歓迎が大変印象深かった。

長崎大学と韓国原子力医学院とのMOUが締結され、今後、両機関の関連研究および教育訓練等の持続的な国際協力がより活発になることを期待する。

長崎原爆死没者追悼平和祈念館にて

李　洗英（イ・セヨン）先生　　韓国原子力医学院　行政員

研修期間中、同行して案内・調整等してくださったナシム事務局に感謝の言葉を贈ります。

研修内容はとても充実しており、より多くの研修プログラムを受けたいですが、そのためには期間が短く時間が足りないと思いました。

今後もナシムとキラムスの間に研修プログラムの運営および協力が持続していくことを願います。

朴　泰民（パク・テミン）先生　　釜山大学病院　救急救命士

何の知識もなく長崎に来ましたが、一日一日経ていくにつれ、長崎の原爆投下以降の過程について知ることができ、大変興味深かったです。

日本の関係者の皆様、温かく迎えてくださって本当にありがとうございました。一方、そのため色々気苦労されたのではないか、と申し訳ない気持ちもあります。

良い研修プログラムにお招きいただいたことに感謝し、たくさんのことを学んで帰ります。ありがとうございました。

小中学校で出前講座を開催します。

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識を普及するため、長崎大学の先生方が小中学校へ出向いて講義を行う出前講座を実施いたします。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんに分かりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。講座費用は無料です。

講座メニュー	
放射線って何？－身近な放射線の話	
放射線・紫外線と私たちの健康	
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
	長崎原爆被爆者のこころの調査
放射線といのち	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 第41号
発行／平成29年3月

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者援護課内）
TEL 095（895）2475　FAX 095（895）2578
http://www.nashim.org/